

◇評価

<研究発表会>

期日 令和7年12月19日 来校・オンデマンド配信にて開催
内容 研究報告、実践発表、研究協議会、講評・講演

講評・講演

「育成を目指す資質・能力と授業デザイン～中教審等の動向を踏まえて～」

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

上席総括研究員（命）調整担当部長 丹野 哲也 氏

～講評の概要～

○授業づくりの仕組み

授業をよくしていく仕組みを能代支援学校はシステムとして構築している。「年間指導計画」と「個別の指導計画」を核として教育課程を編成していることは、特別支援学校における重要な取組である。

○年間指導計画

子どもたち一人一人の実態を踏まえて、年間指導計画が作成されている。年間指導計画をベースにしながら、さらに子どもたち一人一人の実態等に応じて個別の指導計画で具体化されている。一人一人の実態に応じた丁寧な具体的な指導をしていくことが特別支援教育であり、その考え方が1時間ごとの授業に反映されていくことが大切である。

○次期学習指導要領の審議動向

「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」、これらを三位一体で具体化していくことが次期学習指導要領のコンセプトである。「深い学びの実装」を考えていく際、能代支援学校がこれまで取り組んできた研究成果が大いに生かせる。

～参加者のアンケートから～

- ・「標準年間指導計画（案）」を基に、年間指導計画を作成することで、教科の視点や児童生徒の目標が明確になり、指導者が替わっても一貫した指導が可能になることを学んだ。
- ・「観点別学習評価表」（学びの履歴シート）を活用することで、学びの積み重ねが可視化され、根拠のあるゴール設定が可能になると感じた。観点別学習評価表（学びの履歴シート）から単元の目標や評価規準をそのまま記載する方法は、誰もが時間をかけずに学習指導案を作成でき、指導と評価の一体化が保障されている点がとても参考になった。
- ・授業に至るまでの流れが整理され、各教育計画や学習指導案等を検討する際のツールも整備されていることで、教師間で共通の物差しを用いた授業づくりが可能になっていることが参考になった。

◇まとめ

成果

- ・「標準年間指導計画（案）」に基づいた授業の実施による学びの連続性の保障
- ・各教科の「見方・考え方」を働かせ、「深い学び」につながる要点の共有を通じた授業改善

課題と今後の展望

- ・「標準年間指導計画（案）」の正案化に向けた検証と改善
- ・「標準年間指導計画（案）」を基にした授業実践の蓄積と共有

令和7年度 秋田県立能代支援学校

研究報告（概要版）

児童生徒の学びが「見える」授業づくり2 ー学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメントと 「指導と評価の一体化」のシステムを活用してー

（1年次/2か年計画）

◇目的

本校では、児童生徒の学びの連続性を確保しながら、知的障害教育校の学習指導要領に示す、各教科等で育成する資質・能力を、日々の授業において確実に育むための授業づくりの仕組みを構築し、授業改善の要点を見いだすことを目的として進めています。

<キーワード>

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 指導と評価の一体化 | <input type="checkbox"/> 学びの連続性 |
| <input type="checkbox"/> カリキュラム・マネジメント | <input type="checkbox"/> 各教科の見方・考え方 |
| <input type="checkbox"/> 深い学び | <input type="checkbox"/> 持続可能な授業づくりの仕組み |

本研究は、令和5～6年度の研究を基盤とし、普段使いできる平易な授業づくりに向け、令和7年度から新たに運用した「標準年間指導計画（案）」を「授業づくりの仕組み」に位置付け、研究に取り組みました。全ての授業を対象に、授業づくりを研究の主軸に据え、授業改善の要点を明らかにすることを目指して検討を進めました。



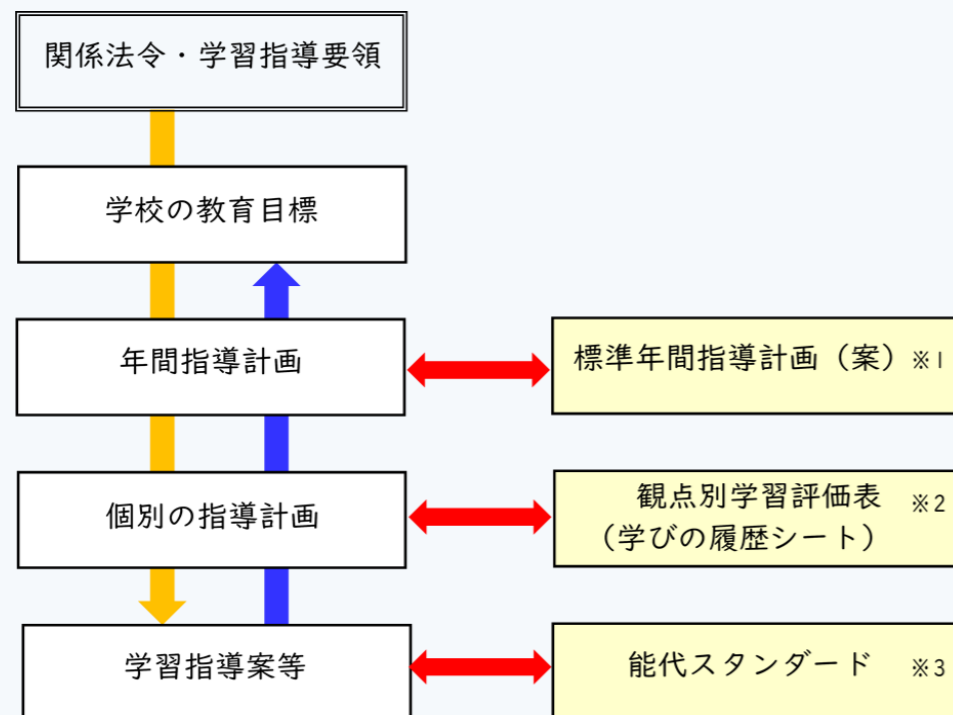
児童生徒の学びが「見える」授業づくり2

－学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメントと「指導と評価の一体化」のシステムを活用して－（1年次/2か年計画）

◇計画 授業づくりの仕組みづくり

- ①学校教育目標の達成を目指し、教育課程の編成・実施の一環として作成する各教科等の年間指導計画において、「標準年間指導計画（案）」を規準として活用する。
- ②指導と評価の一体化を図るため、個別の指導計画を立案する際の規準として、「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」を活用する。これは、児童生徒の学びの履歴であり、このことで、学びの連続性を確保する。
- ③全ての児童生徒の「参加」と「学び」を促す効果的な指導方法「能代スタンダード」を用いて、効果的な指導方法を共有しながら、日々の指導を進める。

本研究では、これらの各教育計画等をツールとして位置付け、①～③の一連を「授業づくりの仕組み」としている。



「標準年間指導計画（案）」※1

学習指導要領に基づき、本校の児童生徒が12年間で育成する資質・能力について、指導内容の配列や指導時数、指導の形態等を検討し、体系的に整理・作成したもの。

学習指導要領に示す内容を本校の教育課程として具体化する際の規準として位置付け、年間指導計画の作成に活用する。

「観点別学習評価表」※2

各教科における内容のまとまりごとの評価基準であり、在学中に育成する資質・能力を網羅したもの。併せて、「学びの履歴シート」として、学習の履歴と評価を蓄積することで、一人一人の学びの連続性を確保する。

「能代スタンダード」※3

ユニバーサルデザインの考え方から児童生徒の「参加」と「学び」を促す指導方法を集約したもの。

- ・環境設定（物理的・人的支援）
- ・活動内容や場面の設定
- ・ICT機器の活用
- ・「見方・考え方」を育む視点

◇実践

年間を通して、全校授業研究会を3回、授業研究会を19回実施した。教科別研究グループによる授業研究と「標準年間指導計画（案）」及び年間指導計画の妥当性の検証・改善を中心に進めた。

小学部1・2年 日常生活の指導「朝の活動・朝の会」

「朝の活動・朝の会」において、児童の実態に応じ、主な指導内容として、生活科の「基本的生活習慣」「日課・予定」「人との関わり」「役割」「仕事・手伝い」を段階的に取り扱い、指導を行った。各児童のねらいにおける実態を1～2か月ごとに評価し、できるようになった活動を置き換えて指導していくことで、生活科で育成を目指す資質・能力の計画的な育成につながった。

小学部5年 生活科「しらべよう ～ゴムのひみつ～」

生活科の「ものの仕組みと働き」の指導内容が理科につながる内容であることから、理科の「見方・考え方」を活用し、予測→実験→考察の活動を踏まえた学習を計画した。予測を立てて結果を振り返る活動を繰り返す中で、児童は、予測し、ゴムの力で動く模型の飛行機や車を動かし、実験結果に基づいた具体的な気づきを他者に伝えた。また、「ゴムを弱く引っ張ると近くに止まる」など、力の大きさや動きの関係性を考え、発言するなどして学びを深めた。

高等部3年 社会科「我が国の地理」

国の位置や空間的な広がり捉える「見方」や、比較・関連付ける「考え方」を働かせる活動として、修学旅行など生徒の体験を取り上げながら学習を展開した。障害特性に配慮し、必要な情報を精選するとともに、方角記号を追加した地図資料を用い、既習事項をいつでも参照できるようにディスプレイで掲示した。その結果、生徒が地理学用語や方位を用いて具体的な言葉で説明する姿や、経度や緯度の違いによる国の特色について疑問をもつなど、主体的に問いを発する様子が見られた。また、生徒同士で気づきを共有する姿も見られ、深い学びにつながった。